

研究者と巡るセメント美術

美術史研究者 坂口英伸

No.9 セメント版画

今回はこれまでとは趣向を変えて、セメント版画を取り上げよう。セメント美術のバリエーションは、彫刻のような立体造形のみならず、版画のような平面造形にも及ぶのである。初等教育に組み込まれた版画は、多感な児童にとって、重要な造形教育の一つである。読者諸氏も小学校の図工の時間に、木版画を制作した経験があるだろう。版木を彫刻刀で削り、その上にインクを塗布し、紙をかぶせて上からバレンで擦って転写させるというあの木版画である。セメント版画とは、この版木が木製からセメント製に代わったものと考えて差支えない。つまりはセメント製の版下を版画紙へ写し取ったものがセメント版画である。

掲載の作品は（図1）、中尾義隆（なかお・よしたか／1911－1994）によるセメント版画《休憩時間》（1958年）である。サイズは縦49.0×横31.5（cm）。本作は抽象的な作品である。長方形とサークルから構成される幾何学的なグループが画面の上下に一つずつ存在する。長方形とサークルは黒の太めの輪郭線で表現され、長方形が重なり合う部分は淡いピンクが塗り込まれている。背景はまさにセメントを想起させる薄い灰色である。重複部分を除く長方形の内側には、さらに濃い灰色が塗り込まれている。この濃い灰色の着色部には、うっすらとセメントが付着されており、触るとザラザラした感触を覚える。摺る際に版下のセメントが版画紙へ吸着したのだろう。これは「生乾きのセメントに彫刻刀で刻し、完全に固まる前に刷り上げる、義隆独自の技法」で「すべて自刷りによる手作業」という（中尾義隆公式ウェブサイト：<https://www.nakaoyoshitaka.com/cement>）。版画紙の下部には、署名として「y. n a k a o」、エディションナンバー（制作枚数）として「3/5」（5枚刷られたうちの3枚目という意味）、制作年として「1958」の書き込みがそれぞれある。

中尾は愛媛県北宇和郡（現宇和島市）に生まれ、同郷の版画家である畦地梅太郎（あぜち・うめたろう／1902－1999）の影響を受けて版画も手掛けるようになったという。中尾がセメント版画を手掛けた契機として、1943（昭和18）年頃、自宅改装中に台所でセメントを塗り込む作業をしていたときに、生乾きのセメント上に刻すればセメント版画になることを思い付いたという逸話が知られている。

セメント版画の技法は、すでに昭和戦中期（昭和十年代前半）には確立されていた。セメント美術の理論家の矢崎好幸（やざき・よしゆき／1894－1950）は、自著『セメント工芸——セメントの扱いに関する科学的芸術的基礎と其の応用』（丸善、1935年）において、「セメント版画」という項目を立てて、その制作方法を解説している。以下に矢崎の解説を要約しよう。セメント版画はセメント版の制作から始まる（セメント版が市販されていないため）。ガラス板を有する型枠にセメントを注入し、それを約8時間後に型枠から外し、ガラス板に接した平滑な面に墨汁で下絵を描き、その下絵を彫刻刀で彫っていく。彫刻

刀は木版画に用いるものを代用する。セメント版が硬すぎる場合には、砂糖水（7％）を塗布し、軟らかくなったところで彫っていく。適度な硬さをコントロールするために凝結遅延剤（緩結剤）を塗る場合もある。次に墨汁・絵具・印刷インク・油絵具などを刷毛（あるいはローラー）につけてセメント版の表面に塗る。セメント版の表面上にわずかに湿気を与えた胚紙・奉書紙・華仙紙などを載せ、その上にさらに乾いた一枚の紙を載せる。最後にバレンで紙を摩擦して転写させると完成だ。掲載の作品は（図2）、実際に矢崎が手掛けたセメント版画である。

一般に版画は絵画の延長と捉えられがちだが、実は多くの相違点がある。版画は版を介するため、必然的に彫りや刷りなどの段階的な制作過程を踏むこととなり、結果として完成までのアプローチは絵画と違ったものになる。版画の種類には、木版画のほかにも、銅版画、石版画（リトグラフ）、シルクスクリーンもある。セメント版画という技術は、セメントの応用域の広さと多様性を感じさせる。セメントは土木や建築の素材に限定されずに、美術素材としても積極的に応用されてきたのである。セメントと芸術の融合には、改めて驚きを禁じ得ない。



図1 中尾義隆《休憩時間》（1958年）



図2 矢崎好幸によるセメント版の実例